

---

# 『羞恥は捨てて』

愛弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『羞恥は捨てて』

### 【Nコード】

N3383J

### 【作者名】

愛弥

### 【あらすじ】

鏡には、ある願望があります。それは、恋人の雪と手を繋ぐこと。

## （前書き）

高校一年生の鏡と雪は、男同士で付き合っている。

ある日、デートをしている時、鏡はある願望を叶えてもらおうと雪にお願いします。

その願望というのは、普通の道中で、手を繋ぐこと。

羞恥は捨てて、  
たまには  
道中で。

『羞恥は捨てて』

ざわざわ、と騒ぐ道中。

久しぶりに、あいつとデートをしていた。

デートツて言っても、ただ他愛もない会話をして、ただ単と肩を並べて歩いているだけ。

端から見れば、デートしているようになって見えないう。

男女二人が、歩いていけば、まあたいていの人はカップルなんだなと思うだろうけど。

俺も男で、あいつも男。

そう、俺らは男同士で付き合っている。

だからカップルらしい行動をそうそう出来ない。

いや、俺は別に構わないんだけど。

あいつが嫌がるんだ。

恥ずかしがり屋なのか、ちょっとしか人がいない道でも、手を繋ぐうとしたら怒って手を振り払われるし。

照れてちょっと顔を赤くしてるとことか、可愛いんだけど。

こつも恋人らしい行動が出来ないのは俺的に嫌だ。

だって、折角思いが通じ合って付き合えるようになったって言うのに。

恋人らしい行動が出来ないなんて。

悲しすぎるじゃないか。

それをあいつに言ったら。

『外でやなくなつて、家の中でうざい程くっついてきてるだろう』

って言うんだ。

本当にあいつは俺の気持ちを全く理解していない。

俺は、家でも、外でもあいつといちゃつきたいのに。

もっと言えば、回りに見せ付けたいぐらいだと思ってる。

こいつは、俺の恋人だつて。

俺達は、付き合ってるって。

回りに教えてやりたいんだ。

まあ、言葉を変えれば自慢したいっていうことだけど。

俺は、こんなにもかっこよくて、可愛い恋人と付き合ってるんだって。

皆に自慢したいんだって。

そんなことをあいつに言ったら、怒られるだろうけど。

でも、たまには俺の願望を叶えてほしいものだ。

たった一つ。

たくさんある中から、小さい願望でいいから、叶えてほしい。

だけど、そんなことを頼んだってきつとあいつは。

『ふざけるな』

と言って怒るだろうから。

今回は許可を取らずに、無理矢理やってやろうと思う。

たまには強引なのもいいんじゃないか？って思うんだ。

こうもしないと、俺の数ある小さな願望が、叶えられる時はこないと思うから。

「ちよっ…おまつ、鏡!!」

「……………」

「鏡っ!!…テメ、離せ!!」

ぎゅ、と無言であいつの右手を掴んで、少し急ぎ足で道を進んだ。

突然握られた手に驚いたあいつは、俺の手を離そうともがいている。

だけど、離すものと俺が強く握っているから、俺より少し背の低いあいつはどうやら失敗したらしい。

力で離させるのはやめて、今度は口で攻撃を開始した。

「鏡!!…聞いてんのか?!…離せ!!」

「……………なあ、雪」

「……………なんだよ」

ぴたり、と足を止めてあいつと向き合つと、あいつはなんだか罰の悪そうな顔をしていた。

だけど、ほんのりと頬が色づいている。



「たまには俺の我が儘聞いてくれたっていいんじゃない？」

「……ハ？」

「俺、雪とこうやって恋人らしい行動がしたかった」

「家でやってんだろ」

「違う。俺は、外でもしたいの」

外でも、普通の恋人達みたいに、手を繋いだりして歩きたいんだ。

どこの乙女だって、何時もお前はそういうけれど。

やっと好きな人と一緒になれたんだ。

恋人だからこそ出来る行動をしたいって、思うに決まってるじゃないか。

「……んなの知るか」

どれだけ、俺の我が儘を聞いて欲しいって言っても、全く叶えてくれようとしない。

どうして俺の恋人はこんなにも、ツンの部分しかないのだろうか。

「なあ、雪。そんなに俺の我が儘聞いてくれない？」

「ああ。」

「ふうん。……じゃあ、今夜は覚悟しといてね」

「……ハ？」

「眠たい、だなんて我が儘言ったって俺聞いてやんないから」

ぱ、とあいつの手を離し、すたすたと一人で歩き出すと、2テンポ遅れて、焦りながらあいつも歩き始めた。

そして、

「…今回、だけ…だからな。」

やっとデレを出してくれた恋人は、俺の右手を軽く握ってくれた。

そんな行動に思わず、笑みが零れる。

「じゃあ今夜は許す」

「……当たり前だ」

「あーでも、どうしよっかな。今日の雪めっちゃ可愛かったし」

「ハア?!」

「嘘嘘。やんないよ。まあ、俺の理性しだいだけど」

「……馬鹿が」

今日、俺の小さな願望が叶いました。

それを叶えてくれたのは、今隣でぐっすりと眠る、可愛い恋人。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3383j/>

---

『羞恥は捨てて』

2011年1月8日20時04分発行